

2024 年 3 月 16 日（土）に 2023 年度 TAP センター研究会を学内外の方々 91 名を迎え開催いたしました。今回、TAP インターン生より報告をいたします。

◆プログラム

テーマ「TAP は非認知能力の育成にどのように機能するのか」

2024 年 3 月 16 日（土）

1. 全体会 13:00~13:45
2. 分科会 14:00~17:00

1. 全体会 記録 TAP インターン 4 年 佐藤 千夏

場 所：玉川大学 大学教育棟 2014 521 教室

担当者：橋本 大輔先生（さいたま市立西原小学校校長）／川本 和孝（TAP センター）

司会者：工藤 亘（TAP センター長）

参加者：63 名

内 容：テーマ「TAP は非認知能力の育成にどのように機能するのか」※対談形式

- ① 挨拶（司会：工藤センター長）
- ② 橋本先生・川本先生の紹介（司会：工藤センター長）
- ③ 橋本先生×川本先生による対談

I. VUCA 時代から BANI 時代へ（橋本先生、川本先生）

VUCA は 1990 年頃の考え方であり、平成 8 年には中央教育審議会の答申で「生きる力」にも含まれている。VUCA(1990 年頃)→TUNA(2000 年頃)の時代を経て、現在は BANI の時代と言われている。特徴として、非線形性が高く予測不能な変化を遂げるため、逆算型の未来が通用しなくなる。つまり、不確実な社会を生き抜く子どもをどのように育てていくのかに焦点を当てたのが、非認知能力である。

II. TAP について（川本先生）

TAMAGAWA ADVENTURE PROGRAM の略称である。また、全人教育の達成を目指す上で、教育活動をより円滑にする TAP 的概念の総称であり、さらには教育手法としての側面を持ち合わせる。つまり、TAP は(1)略称として、(2)概念の総称として、(3)教育手法としての 3 つを内包するのである。また、人間関係形成能力、セルフマネジメント能力、問題解決能力といったポータブルスキルを育むことが目的となり、非認知能力に直結するものである。

III. 非認知能力を考える上での認知能力（橋本先生、川本先生）

現在の学校教育では、テスト学力と言われるような知識や技能に傾倒しており、認知能力でさえ総合的に育てることができていないと考える。認知能力の中で特に重要と考えるのが、「外挿する能力（視覚的に認知できる状況から、その未来に何が起こるかを考える力）」である。また、非認知能力は認知能力を土台に成り立つもので、非認知能力のみ育てることは不調和の人格を形成することになる。学校教育においては「うまくいった」、「うまくいかなかった」理由を考える際に、本来であれば感情が表出されるはずだが、感情を抜きにした言葉、所謂表層のみを捉えた振り返りになることが多い。

IV. 令和の日本型学校教育「個別最適な学び」と「協働的な学び」（橋本先生、川本先生）

一人ひとりに合わせた学び（個別最適な学び）のためには仲間と学び合うことが必要である（協働的な学び）。BANI 時代においては、特に自己成長できる人材が求められている。自己成長の際にはセルフマネジメントが重視されるが、それはポータブルスキルであり非認知能力である。その際に、協働できる個を育てることが学校/学級の中において求められると考える。ただ、実際として「この人からは学びたくない」という感情が芽生えることはありませんか。どんな人とも共に活動する場面がある TAP では、どのように感情を扱うのかは注目すべきポイントであり、「TAP は学校教育で感情をうまく扱うための切り口になるのではないか」というのが今回の核心と考える。

V. 感情の扱い方について（川本先生）

認知できる能力が、各教科/領域（教育課程全般）の中で育てられるかがポイントである。「他者

との協働」する上での「共感」を実現するために、TAP では「感情の認知（認知能力）→感情の理解（認知能力）→共感の形成（非認知能力）」というプロセスを辿ると考える。たとえ、感情を取り扱ったとしても、言語で説明できるものは全て認知能力といえ、「共感」に至るまでの思考が育っていなければ、非認知能力には到達しない。「個別最適な学び」のポイントは「感情」にあるが、学校教育では、「どう感じたか」を言葉で振り返るに終止してしまい、非認知能力を発展させるまでには至らないことが多いと考える。

#### ④ 質疑応答

Q1. 認知能力を育てた上で非認知能力を育てるためには、教師/ファシリテーターとしてどのように関わるべきか。また、非認知能力についてはどのように見取るのか。

A1 見取り（アセスメント）をするためには、教師の非認知能力が求められる。様々なことに楽しむ姿勢や楽しさを見出すこと、疑問を感じることで非認知能力を高めると考える。（川本先生）

A1 子供たちの学びの姿と教師の学びの姿は相似形と言われる。教師自身の学びの姿を高めれば、子供たちの学びの姿の解像度が上がると考える。（橋本先生）

Q2. 現場が変わっていくために、現場（職場）のコミュニティをどう作って行ったら良いのか。

A2. 教師自身の学びを「個別最適」にしていく必要がある。研修デザインや職員室の雰囲気づくりが重要でポイントとしては教師自身が、「やりたいように」、「のびのび」できる環境にある。（橋本先生）

Q3. 教師が自立的に学んでいくためにはどうすればよいか。大学ではどのような教員養成が求められると考えるか。

A3. 自主的に模索できる教師を育てたいが、教職カリキュラムは逼迫している。自分から学ぼうとする姿勢と言った「学び方を学ぶ」のが大学である。やりたいからやる、心の内側から「もっとできるようにになりたい」と思った時の感情こそが重要である。また、「誰かが頑張っている瞬間に共感して、その行動を支援したい」、「誰かが喜んでいる姿を見て幸せになれる」教員を送り出したいと考える。

A3. TAP の要素を学校教育全般において広めていきたい。これから先、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する上で、授業の TAP 化は一般的になっていかざるを得ないと考える。

#### ⑤ まとめ：（工藤 TAP センター長より）

認知能力と非認知能力を切り離すのではなく、相互作用に機能させていくものと考え。それぞれの能力を高める上で、関係性の質を高めることが土台になり、TAP はそこに機能していると考え。

## 2. 分科会 【分科会 1】【分科会 2】【分科会 3】

— — — — —  
【分科会 1】 記録 TAP インターン 3 年 齋木翔子

「TAP 視点での生徒指導・支導と非認知能力との関係性  
— 生きた教材を基にあんでもねー、こうでもねータイム！ —」

場 所：玉川大学 大学教育棟 2014 505 教室

担当者：工藤 亘

参加者：24 名

### 1. 内容

①錯視：固定概念に捉われては、子どもの良さを発見できない！

・弱点ばかりに目がいく。しかし、視点を変えると良い点に着目できるようになる。弱点ばかりみるよりいい点を見た方がいい。

②生徒指導 ≡ TAP

・成功循環モデルは、関係の質→思考の質→行動の質→結果の質→関係の質→…  
→学級や職員室も同様に、関係の質の向上からスタートすることが大切！

・テストで 100 点取った＝人間性が良いとは言い切れない！

→全人教育(真善美聖健富)は大切であり、TAP はこれらを具現化する。

・「成功するかどうか不確かな所に一步踏み出すこと」を Adventure と呼ぶ。

・Teachers as professionals：教師としての専門性を発揮して、子どもの可能性を促進すること

・C-Zone の考え方は、それぞれのスタッフ・業界で派生しながら使用されている。

・D-Zone(Discomfort/Danger) < C-Zone

・D-Zone の状態から TAP の理論と実践によって C-Zone を形成し、Adventure できる環境となる。

- ・チャレンジするためのキッカケを作ることは教師のスキルとして必要なこと
- ・生徒指導では「指導と支導」のバランスが大切！
- ・指導：教師が目的を持って直接的に児童生徒に働きかけること
- ・支導：児童生徒の主体性と目標を最大限に尊重し、教師と児童生徒との双方向のやりとりを大切にしながら、児童生徒一人ひとりや集団の特性や状況、プロセス等を的確に判断し、児童生徒一人ひとりや集団の能力や特性を十分に発揮できるように支援しながら導くこと（工藤,2012）

### ③生徒指導の定義

「児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動」 ≡ TAP

- ・自分らしくとは何か、自己理解できている？

低学年：プラス面が多く見えている or まだ分かっていない

高学年：マイナス面ばかり見てしまう→自己肯定感が低い

- ・C-Zone が広がることが重要でマインドは変わらなくてはいけない！
- ・教職員は生徒の成長や発達を「支える」存在、指導や援助を包括する総合的な概念として「支援」が使用されている。
- ・生徒指導は生徒指導担当の先生だけでなく全教員が担うものであり、全教育活動で機能するもの。
- ・生徒指導はTAPのマインドを持って学習指導とも関連付けて行うことが大切になる。
- ・“見とり・気づき・読み解き・意味づけ”をすることはファシリテーターをする時の視点と似ている。
- ・Anticipation(見通し)⇒Action⇒(行動) Reflection(振り返り)と体験学習サイクルの近似
- ・哲学対話のルールや話し合いのルールを決めてあげることで生徒の話し合いの活発化を目指す。
- ・教師や生徒の理想はワクワクして登校し、明日への期待を胸に下校すること！  
→先生は先に生まれた人ではなく、「先を生きる人・先を生む人」である

## 2. まとめ

「ワクワクして登校し、明日への期待を胸に下校しましょう！」には、生徒だけでなく、教員も当てはまる。教員がワクワクしなければ生徒もついてくることは難しい。明日からも学校にワクワクを求めていく。

---

### 【分科会2】 記録 TAP インターン2年 原 美涼

「小学校における非認知能力としての『思考力』の育成  
—学級経営における教師のファシリテーション及びTAPの活用に着目して—

場 所：玉川大学 大学教育棟 2014 510 教室

担当者：川本 和孝

参加者：49名

### 1. 内容

#### ① 自己紹介

- ・所属、名前、役職/担任している学年、所属している学級/学校/組織の自慢

#### ② 一面多い「夢」について

- ・一つでも多くの夢を持ち、調和のとれた人格形成を目指すのが全人教育。

#### ③ C-Zone について

- ・C-Zone は多くの解釈があり、正解はない。→皆さんはどのような解釈をされているか。
- ・Adventure することにおいて大切なのはS-Zoneを認知すること。S-Zoneの認知ができないと伸びしろを見つけられなくなるため、伸びしろの探し方を学ぶことが重要である。

#### ④ チームビルディングから考える学級経営

- ・チームワークとは何か？

基本的に発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、起立性、ストレスコントロール力をメンバー全員で補い合い、発揮していくことであり、また、メンバー全員が同じ目的を達成するために協力して力を発揮すること

- ・集団の条件整備論

特別活動においては望ましい集団の条件を整備すると言われるが学級の条件を整備する＝学級経営

- ・学級経営と特別活動

学級の集団経営は「学級を組織化」していくことを意味する。

- ・組織とは何か

組織の3要素

- (1) 共通の目的
- (2) 協働への意欲（貢献意欲、役割分担）→見える役割と見えない役割
- (3) コミュニケーション（目的を達成するため）
  - ・ねらい、目的、目標⇒大きい順に並べると・・・？
  - 目的、目標、ねらい

⑤ 学校教育に求められる「社会情動的スキルの育成」

- ・ 非認知能力・社会情動的スキルとは
  - 非認知能力とは、人間の心理的側面において発揮され、人間の感情や意志、性格などの内面的な面に関わる能力。また、社会情動的スキル（非認知能力）の定義には『『長期的目標の達成』、『他者との協働』、『感情を管理する能力』の3つの側面に関する思考、感情、行動のパターン』を指す。つまり、目標や意欲、興味・関心を持ち、粘り強く、仲間と協調して取り組む力や姿勢、などの力のことである。
- ・ 個人/集団アセスメントについて
  - 個人アセスメントのステップ「体験活動→気づきの明確化→仮説化→検証→体験活動…」
  - 気づきの明確化するために Why の質問からその人を分析する→発問するということ。
  - 長所や強み、リーダーシップといった「自身や他者のポテンシャル」を仮説化する。
  - 仮説化のステップが非認知能力を養うと考える。
  - どのようにして他者に届けるか、他者が受け取りやすい届け方が重要である。単なる伝え方という手法ではなく、何をもって伝えるのが教師やファシリテーターの力量となる。
- ・ 仮説化のステップを体験ワーク
  - シンクロニズムストレッチ（①手を放す ver と②手を付ける ver）を体験。

Q1. 手を放したのと手を付けるのとではどちらが好きでしたか。

Q2. その理由についてお互いに聞きあってみてください。

Q3. その理由から考えられるその人についての仮説化をしてみましょう。仮説化に際してお互いの発問をして解釈を深めてみてください。

Q4. Q3 で見えたことから相手の良さや強みについて伝えてみてください。

- ・ジョハリの窓について（開放の窓、秘密の窓、盲点の窓、未知の窓）

Q4 で伝えてもらった内容はジョハリの窓だとどの窓に該当しますか。

→伝え方とどのようにして表現するのか、なぜそれを伝えたいのか。いかにしてキラキラして語れるのが重要になる。

非認知能力は問いを深めていく過程によって育まれるが、発問の際に誘導尋問にならないよう注意。

思考、感情、行動のアセスメントを通して感情のステップを通過すると非認知能力が育つと考える。

Discussion1：非認知能力を育成するうえでの難しさとは何か。また、指導のポイントは何だと思いか？

- (1) 非認知能力の育成はなぜ難しい？
- (2) 師道のポイントは何だと思えますか？
- (3) 育成された非認知能力が持続する／しないのはなぜだと思えますか？

⑦ 非認知能力を育みやすい環境と育みにくい環境～集団の見方・考え方（パラダイム）から～

・ 集団の見方・考え方（パラダイム）について  
 特別活動においては「集団や社会の形成者としての見方・考え方」と示されている。見方・考え方について、英語ではアプローチと訳されることがあるが、「パラダイム」として解釈していく。パラダイムと聞くと、パラダイムシフトを連想する方が多いかと思う。パラダイムシフトとはある時代に常識とされていた考え方が、革命的に変化することを意味する。教育現場においてはこのパラダイムが人によって違うことで生じる教育観のズレ（Ex いいクラスとはどんなクラス？etc）、またはパラダイムシフトが起こらない環境が学年間や教員間の齟齬を生むのである。

・ ティール組織（学級への置き換え版）について

自身の理想、パラダイム、理想、学校の現状はどこにあるかを考える

\* Red（オオカミ）：衝動型 圧倒的な力を持つトップによる恐怖支配

\* Amber（軍隊）：順応型 軍隊的な上意下達の高ヒエラルキー組織

\* Orange（機械）：達成型 成果により昇級可能なヒエラルキー型達成型組織。格差が出てくる。

\* Green（家族）：多元型 ボトムアップ型の組織成果より人間関係を重視

\* Teal（生命体）：進化型 進化する組織個人も組織も進化し続ける

ティール組織の原則として上層ほど複雑であるが優れているわけではなく、ティールは目指すべき正解でもゴールでもない。また、進化は加速できるが、飛越はできない者とされている。

つまり、教師・校長のパラダイムは学級・学校は越えることができないのである。教師による地道な種まきを通じて段階的にパラダイムを進化させるのである。

Discussion2：Teal 組織を基に考える。

- (1) あなたの理想のパラダイムは？
- (2) 身に沁みついているパラダイムは？

- (3) パラダイムをブレイクスルー（上昇）
  - (4) 現状の自分のパラダイムは？
  - (5) 自分の理想とするものと違う人と学年を持った時どうするか？
- 子どもの力で GREEN に行けるときのがある。

## ⑧ 非認知能力とリーダーシップについて考える

### Question

- (1) リーダーとリーダーシップの違いは？
- (2) あなたはリーダーシップがありますか？
- (3) リーダーシップと聞いてどんなイメージを持っていますか？
- (4) あなたはどんなリーダーシップを有していますか？

・リーダーシップ論について

Trait 理論/行動理論/条件適合理論/リーダー・メンバー交換関係理論/変革型理論

シェアードリーダーシップ

リーダーシップは誰もが持っている能力であり、場面によって ON になっている人がリーダーである。リーダーシップを発揮している人が場面的なリーダーになる。カリスマ性を持ったひとりの人材が組織・チームを牽引するのではなく、組織やチームのメンバー全員がリーダーシップを発揮し、組織の目標達成に繋げるリーダーシップ理論

リーダーシップの定義「組織・チームの目標を達成するための他メンバーへの影響力」

リーダーシップの定義「組織・チームの目標を達成するための他メンバーへの影響力」

中学年は山登り理論（4タイプ）、高学年では PM 理論と山登り理論を掛け合わせた 8タイプを使用。

シェアードリーダーシップを発揮できる環境

- (1) 活発なコミュニケーションがある
- (2) 互いに強み・弱みを把握している
- (3) 目標を共有している

シェアードリーダーシップは各自のスイッチの切り替えが必要となる。

→スイッチの切り替えによって、チーム内のメンバーが相互に依存しあう関係性（相互依存性）であることを認識する。スイッチの切り替えによってチーム内のメンバーのやりたいことを応援・支援する事が出来る。

## ⑨ モチベーション

・モチベーションに関する理論

職務特性理論（外部からの仕事の特性や環境が個人のモチベーションに影響を与える）

期待理論（外部からの期待される結果や報酬が個人の動機づけに影響を与える）

ゴール設定理論（自身で目標設定し、それに向かって努力することで内的な動機づけに影響を与える）

社会認知理論（他者との関係や社会的な環境が個人の内的な動機づけに影響を与える）

プロソシヤルモチベーション（自身の行為によって、他者が喜ぶ/嬉しくなる姿が内的な動機づけに影響を与える）

まずは、職務特性理論から入ることが多いが、TAP ではゴール設定理論から入り、モチベーションの条件を段階的に整えることで Adventure しやすい環境作りを行っている。

Discussion3：これまでの話し合いを統合して、グループで自由に討論してください。

- (1) 気づきや学びをまとめる
- (2) 質問や疑問を挙げる

学級におけるファシリテーションに求められること

・個人の社会の情動的スキルが育まれていない学級では、レッド型やアンバー型、オレンジ型組織で「管理」「コントロール」しないと、組織が崩壊していく（まとまらない）ことが多い。

→時代は変化しているから、求められることも変化する。やることも変化しなければならない。

## 2. 分科会での学び（参加者の意見より）

Q1. 学級経営でのポイントについて教えてください。

A1. (1) 自分から子どもに関わること、(2) 自分が子どもと一緒に楽しむ

Q2. 非認知能力を育むにはどのようにしたらよいか。

A1. 確実な正解はないが、認知能力から入り、非認知能力を育てる順序性があると思う。どの段階に何を持っていくのか、どのように持っていくのか、何を発問するのは非認知能力が低ければ低いほど why が難しいから、発問を繰り返す中で教師自身と子どもの非認知能力を育てることが必要。

Q3. Teal 組織の段階によって生まれやすい非認知能力があるか。Red では育たないと思う。また、Red の担任の先生になってしまって学校にこられなくなってしまった児童はどうしたらいいのか

A3. 一番いじめが多いのが Red のクラスで他人を認められていない。Red のパラダイムの教員は自分のことが俯瞰して見えていないため、その問題は生じている。常に Red と Amber が多い世の中

当たり前とせず、時代と共に変化をしていく姿勢を私たちが担っていく必要がある。

【分科会3】 記録：TAP インターン2年 望野 華

「はじめての TAP 体験」

場 所：玉川大学 大学教育棟 2014 517 教室、屋外（大学敷地内）

担当者：村井 伸二

参加者：7 名

#### 1. ねらい

タイトルがはじめての TAP という分科会であったが出席者はインターン卒業生及び学生であったことから内容を「Reflection（振り返り）」に変更した。TAP に携わった経験をもとに数年社会人として生きた、学生としての振り返りをどう捉えてどう活用していくかみんなで語り合う場とした。こういった活動は非認知能力を培うために重要であるとも考えた。

#### 2. 内容

① スライドから Reflection についてみんなで問いについて考える。

Adventure と「旅」と「自然災害」の結びつきについて

プログラムにおいて振り返りとなるとその中の C-zone から一步踏み出すということに焦点化する。また人生において考えてみると「旅」自ら踏み出していく、「自然災害」といったあちらからやってくる試練に対して踏み出していくことにも置き換えることもできる。様々なケースから Reflection について考えた。

② ラジコンカーを使った新アクティビティ！

玉川の各場所に向かい旅に出る前にアイスブレイキングとしてラジコンを活用して自らの旅（操作）、そしてみんなでコントロールしてみる（共有）についてラジコンを通してアクティビティとして置き換えてみた。

誘導の指示を出す人（1 人）、紐が付いたレバーを指示通りに引っ張る人（6 人）で力を合わせて、目的の場所まで、ラジコンカーを走らせるという活動

③ 大学の敷地内（松下村塾、トーテムポール）を歩いて、個人で人生を振り返る  
学びに振り返りをどのように活かす？ 人生振り返っている？

Reflect what meaning of your life

〈振り返る問い〉

- ・何が私を幸せで生きていると感じさせてくれるか。
- ・自分は何が得意か。
- ・どうすれば世界に大きな価値をもたらすことができるか。
- ・収入が重要ではなかったら、皆さんは何に価値を生み出すか。
- ・自分の遺産は何になるだろうか。
- ・これから困難が続いていく世界をどう生きるか。

松下村塾では吉田松陰先生がどんな人生を通じてこの塾を創設したのか、そしてなぜここ玉川学園・玉川大学に松下村塾があるのか考えた。

またプール横に立つトーテムポールの経緯をみんなで共有し、その意味をそれぞれに置き換えた。

その後、教室に戻るまでに 1 人で歩きながら振り返りを行い教室に戻ってもらった。

④ ユーモアを用いることによって強まる 4 つの効果

人生には楽しいことばかりではなく試練も多い。それらに対してチャレンジするためにはユーモアが必要であると考え。ユーモアに関する書籍を紹介しながらこれからの試練（ネガティブ）をこれからの希望（ポジティブ）として生きていくために重要な要素となりうる。ユーモアを用いることによって「パワー・繋がり・行動力・レジリエンス」が強まると言われている。これらは全てアドベンチャーに通じ、ユーモアはこれから必要になってくるかもしれない。

- ・アドベンチャーはどこに向かっていくかではなくマインド次第である。
- ・アドベンチャーは、「旅、震災」である。旅は、自分で進んでいくが、震災は向こうから来るもの。向こうから来る状況の中で、アドベンチャーをしなければいけない。つまり、自らのアドベンチャーと、受け入れなければいけないアドベンチャーの 2 つがあると考え。

【格言：人生は大胆な冒険か、何もないかのどちらかだ。人生は旅だ、最大限に楽しむこと。】

⑤ 中村仁美さんのお話

- ・中村仁美さん（玉川大学教育学部卒業）

コロナ明けの 2022 年から、2 年間南米のパラグアイで JICA 職員として、小学校でボランティア活動

をする。英語は勉強して慣れてくるものの、パラグアイの公用語はスペイン語なので、英語よりもスペイン語の方学べる環境で、中南米6カ国を旅した。現在は、JICAでお世話になったホストファミリーの家で過ごしている。

〈海外に出た理由〉

きっかけは、一冊の本から。もともと海外に憧れがあった。日本の世の中だけではなく、全く知らない世界を見たかった。自分もいろんな国に行って、広い視野を持ちたい。大学1年生でShin(村井伸二)に出会って、いろんな国へ旅をするShinに刺激を受けた。日本から近いアジアに興味を持って、JICA海外協力隊を受け、2年間JICAで働くことになった。旅に出ることは「生き方」だと考えている。日本は特別な国で、日本語と言う独自の文化を築き上げてきた中で、日本を知るためには、まずは海外を知らなければならない。海外を知ることで、人間的なレベルや人としての力がついてきたのを実感する。海外に行つて得たものは、「日本って本当にいい国」だということ。日本へのありがたさを感じる事がすごくうれしい。一人で旅をしても、常に誰かに会って、コミュニケーションしながら一緒に旅ができることが財産。

〈質問タイム〉

Q1. パラグアイに行く前と今の自分でどのような変化がありましたか？

A1. 間違いなく言えることは、凶太い軸ができた。「自分」というのができてきた。パラグアイの社会の中で、日本人としての当たり前や考え方が通用しないこと、認められないことにつらいこともあった。しかし、そこに対応する柔軟性も身に付けられた。軸があるけど、何が来ても落ち着いて対応できたし、気持ちの面でも自己コントロールができています。今後未来で、何かつらい出来事があるとしても、2年間乗り越えられた過去があるから大丈夫と思えるようになった。

Q2. なぜ、パラグアイに行こうと思ったのか。

A2. 日本の生活を抜け出して、なんと少しでもJICAに受かりたかった。自分が行きたいという気持ちだけではなく、今までの人生、何をしてきたか？と感じていた。また、パラグアイの活動、仕事の内容が適合していたことやパラグアイの国民性に惹かれたこと。

Q3. 同じ志を持った同期と話されていたが、その「志」とは何か？

A3. 同期のみんなは、生まれ持った性格、生きてきた環境、どんな人生を歩んできて、どんなことを学んできたかはみんな違う。しかし、後進国に興味を持っている点から、自分の意思や、強い思いを持っている人が多く、面白くて分かり合える。後進国に対して、手を差し伸べたい、外国に行つて何かしたいという、そういう思いから気持ちとして、つながることが多かった。

Q4. 辛いことがあったりした時に、そこでめげずにもう一回頑張ろうというエネルギーって何ですか？

A4. 母から「ひとみが決めた道じゃん。ひとみが決めた道だから大丈夫だよ」って言ってもらった。結局自分が決めたことってやり遂げられる。自分で責任を持てるから。しかし、相手から言われたことは続かない。これは、教育的な視点からも生かせる。そもそも、今ここに自分が居られることに感謝の気持ちがあったから、辛い時も乗り越えられた。そして、海外が好きというのは消えずにずっとある。大学生のみんなへ、誰かから言われたからやるのではなく、自分がこうしたいからやるで人生を決めて欲しい。

Q5. 旅の意味。自分の旅が自分の人生にとってどんな意味を持っているのか。

A5. 旅は「生き方」。旅は、楽しいだけでなく辛いこともある。トラブルにも鉢合わせる。しかし、それをなんとか自分の力でやり遂げた時に、自分にはこれができると気づき、自信になる。いろんな困難があっても乗り越えた後に、いろんな景色が見られるところが旅の好きなところ、旅の面白さ、旅の意味。

日本は便利すぎるから、困難や壁はあまり感じない。しかし、海外は本当にいろいろなことが起こる。昨日は、40°Cの中、停電して冷房が使えず、大変だったけど、そこから学べるがあった。これが当たり前じゃない、電気があることが当たり前じゃないのだと。昔の人は、自分で1から火を起していたのだから。そこから、日本の環境にありがたさを感じるし、自分が今置かれている状況って当たり前じゃないのだと感じた。そうして、感謝の気持ちが生まれて、心に余裕が生まれるし、他人も自分も大切にしようって思える。旅をすると、いろんな見方をすることができる。今自分はどうやって生きていけるのだろうかと考えられる。海外は、私にとって素でいられる場所。以前、アルゼンチンのブエノスアイレスから、ウルグアイのモンテビデオまで船で国境を渡ったのがすごく面白かった。次は、トルコを左に行つて、ヨーロッパ全部回つて、北欧までたどり着いてどっか行きたい。そこから、スペインから船でモロッコまで行つて、アフリカを回ろうと思っている。

3. 分科会での学び（参加者の意見より）

「あなたが幸せを感じるのどんな時か」「自分の人生について振り返る」

大学の敷地内を歩いて、一人になって考える → 7人の言葉を一人ひとり聞くことができた。

・自分が考えたこと、考えていることを人に伝える「振り返る」という行為はとても大切だと感じた。しかし、「人に伝えること」が義務になるのではなく、そういう環境を作ることが必要になる。パラグアイからひとみさんが言うてくださったように、誰かから言われたからやる、やらなきゃいけないからやるのではなく、本当に心の底から、自分がやりたいことをやることで、楽しみながら人生を生きたいけるようになれたらよいと感じた。

#### 4. まとめ（記録者より）

村井先生の言葉や、パラグアイから参加して下さったひとみさん、参加者のメンバーの言葉を聞いて、一人ひとりの旅（人生）についての一部を知ることができ、深い時間となった。改めて、自分の人生を振り返ることや、他者の生き立ち、どのように生きてきたかを、この「今」という時に聞くことは、何か意味があると感じる。私にとって、これからの人生について考えるきっかけにもなった。「振り返る」という行為をプログラムの中だけではなく、日ごろから行っていきたいと思ったと共に自分を見つめるうえで重要な時間になると感じた。参加者一人ひとりがこの先も自分の人生を楽しく生きていけるためのきっかけづくりを得ることができた分科会となった。

以上